

志賀直哉「雨蛙」の世界を解読する
-リアリズムとサンボリズムの融合体小説-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学文学部文芸研究会 公開日: 2017-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮越, 勉 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/18504

志賀直哉「雨蛙」の世界を解読する

——リアリズムとサンボリズムの融合体小説——

宮 越 勉

はじめに

志賀直哉の短篇小説「雨蛙」は大正十三（一九二四）年の『中央公論』一月号に発表された。原稿用紙わずか二十三枚ほどの短篇「雨蛙」はその完成までに約一年半も費やされるという大変な労作、苦心作であった。このこと自体も作者志賀にとってあまり類例の見ないことであつたが、「雨蛙」の同時代評が幾つか出されると、これも志賀にとって異例とも思える、三人の同時代評に対する反論をふくむ作品制作の裏事情などを語った随筆

「雨蛙」に就いて」（『時事新報』、大13・1・25、26、27）をすぐさま発表したのである。本稿は、まずは「雨蛙」発表当時の文壇の反応、作者志賀のありようなどを詳細に検討することから始めたい。この点に關しての結論めいたものを先走って言えば、「雨蛙」は、作者側の意識としては一定の手応えのあつた仕事で自信作としてあつたのではないか、かつまた、いわば「リアリズムとサンボリズム」の融合による芸術作品だつたのではないか、と主張したのである。次に「雨蛙」の作品世界をいかに読むかという文学研究上の肝心な問題がある。私見によれば、「雨蛙」には数々の未だ解明されていない

謎が多いため、作品解説が不十分のまま「雨蛙」の正当な評価がなされて来なかったように思われる。ここでその一例を挙げれば、作品冒頭の一文「A市から北へ三里、Hと云ふ小さな町がある」というこの小説の舞台設定とされるA市およびH町が具体的にどこなのかについて、研究者サイドによる「雨蛙」の先行論文で触れたものは皆無であった。A市、H町は日本のどこなのか、私はこの十年來考え続けて来たが、ようやくA市は明石市であり、H町は明石市の北方、正確には北北東に位置する樋谷村の福谷という集落が多少のデフォルメを加えながらも描かれていたのではないかと、という結論に達した。妻の姦通事件という刺激的な題材が扱われているため、作者志賀は、具体的な地名が特定されないように配慮してA市やH町としたのであって、A市やH町は決して架空のものではなかったのである。それを実証してみたい。さらにこのことが当を得たものであれば、「雨蛙」がなぜ長興善郎にデジケートされたのかという、これまた先行論の誰も言及していない一つの謎も解明されてくるのだ。このような作品冒頭部からラストシーンに至るまで精細に読むことに心がけ、さらには贊次郎（人名なので「贊」の新字でなく「贊」の旧字を使う）とせき夫婦の

その後のことまでを想像してみたい。「雨蛙」は今日では志賀全作品のうちでも評価がさほど高くはない。が、「雨蛙」は志賀全短篇のなかでも少なくともベスト5に入る、いや、実は埋もれた日本近代文学の名作短篇だったのではないかと、という個人的な思いを抱いている。

一

「雨蛙」に関する同時代評として、藤森淳三は、「まったくこの作は、すら／＼と読み流しただけでは、いゝものかわるいものか、ちよつと見当がつかかねる。が、後になつて日でもたつて思ひ返してみると、この微塵術気もなければ匠気もない、一見何んの奇もないこの作品が、実は極めて気品の高い、そしてなごやかな芸術品であることがわかつて来る。おゝ！何んといふ気品の高い芸術品であらう！、「底深い光りを放つてゐる」（田舎の正月——新年文壇評——その五、『国民新聞』、大13・1・5）とその読後四日を経ての印象から激賞しているが、「ただ終りのところで、主人公が本を焼き捨てるといふ一行があるが、あれはない方がいゝやうに思ふ」、「雨蛙を見たところだけで十分作者の暗示は利いてゐる筈である」

と注文を付けている。正宗白鳥は、「志賀氏の『雨蛙』は、電信柱の雨蛙を 味ありげに書添へたのが、私にはわざとらしく感ぜられたが、それを外にしては、絶好の短篇である」(『新年号から 長短十箇の作』、『時事新報』大13・1・5)と概ね高い評価を与えている。川端康成は「雨蛙」にかなりの長文の批評を行なっていて、その要点を適宜引用すれば、「この作品中の世界は幾分変態的であり、作者の態度は理想的である」とし、「このせきも、この夫も不自然であるが、その不自然を通じて、作者は好きな女、云ひ換ると、愛着する心の姿を書いたものだと思へる」といい、「算作家である作者の材料に對するページエントラウは、作品に深みと拮がりを与へてゐる。作者の憧憬と理想とが、藝術的な氣韻と魅力とに円くされて、現実より高い空に流れる世界を築いたものである。主題の一つに、心の純朴と素直を汚す文藝の雜音に對する叱責があると見てもいゝであらう」(『新春文壇の收穫(一)——志賀直哉氏の「雨蛙」——』、『都新聞』大13・1・5)などと論評し、高い評価を与えているのである。ところが武藤直治は、「主人公が、前夜あやまちを犯した美しい無智な妻君の放心した容子を見て、憤りや嫉妬ではなく慾情の昂奮を感じると云ふこの作の中

心的表現は、ある実感を感じさせられるが、その背景となり、筋道となつてゐるところが少し調子が低い、換言すれば実感を遊離して感じさせられる。またこの作者は深さは十分だが、^中と広さと視野が狭く思はれる」(『創作評に言を托す』(上) 春夫、直哉二氏の作品、『東京朝日新聞』、大13・1・8)と否定的評価をしたのであった。さらに江口渙は、『中央公論』同誌上发表の正宗白鳥の「他人の災難」と「雨蛙」を比較し白鳥の作の方を幾分高く評価したうえで、「然し、志賀氏も正宗氏もやはり以前と同じく、あまりにリアルであり、そして唯リアルでのみある事が私には物足りない。その上私は「雨蛙」を読み終つて一寸名状出来ない一種不愉快な氣持に打たれた事を云ひ度い」とし、「人生に對してまことに無道德である事(不道德の意味ではなく)から来る不愉快ではないのだらうか。そしてその無道德の实在性が足りないのも亦遺憾である」(『復興第一春の文壇を総評す』(七)、『讀賣新聞』、大13・1・12)とこれもまた否定的な批評をしたのであった。生田長江は、「氣持よく読むことの出来た好個の短篇」とし、「贊次郎といふ文学好きな青年が、変態性慾者であるのは改めていふまでもあるまい」としながらも、これが「美化、道德化」によって読

者等は勿論、作者自身まで「総てを恕す態度だとかいふやうな、人道主義的なものと混同して」しまう「心配があつて困るのである」(「一月の創作(十)」および「一月の創作(十二)」、『報知新聞』、大13・1・18、19)と論評したのであった。

右のように、川端康成が絶賛し、若干の批判、注文をふくんでの「絶好の短篇」などとしたのが藤森淳三と正宗白鳥としてよく、武藤直治と江口渙は否定的評価を下したのであって、同時代評はいわば賛否両論の観を呈していたといえよう。こうして、志賀にとつては異例のことと思われる迅速な反応を示したのが随筆「雨蛙」に就いて(『時事新報』、大13・1・25、26、27)であつた。次にこれを仔細に検討してみたい。

二

ここで志賀は、まず、第一に、「元来「雨蛙」は長篇「暗夜行路」の後篇を書き上げた所で、丁度その反対なものが書きたくなる要求から書く時の為めにとつてあつた、とつて置き材料だつたのであるが、「暗夜行路」が却々^{おと}あかず(『暗夜行路』後篇第三の十九に当たる

初出部分が『改造』に発表されたのが大正十二年一月で「これから再びその妻の過失に近い不義で苦しみぬく事を書かうとしてゐる」がなかなか書けずにいる状況にあつた)、作者としても「充分に書かうとすると随分或る意味では閉口しさうな気もするので」、「丁度その反対に、姦通され、それを怒るよりも、それから却て妙に細君をいとほしむ気持になる主人公を書いて見たいと自分は考へた」とその執筆動機を語っている。が、この短い文脈のうちにも誤解を招きやすいものがふくまれていと思ふ。志賀がこの時点である「長篇「暗夜行路」の後篇」とは謙作が妻直子の「過失に近い不義で苦しむぬ」いた挙句、大山に赴き、直子を赦そうという境地に達するまでを指すのかどうかということである。結果的に、「暗夜行路」の後篇が完成するのは昭和十二年の四月という遙か先のこととなつたが、私見によれば、ここである「長篇「暗夜行路」の後篇」とは、結果的に謙作が直子の過失を赦すことにする心つもりがあつたであろうが、その主要部分、多くその筆を費やすのは、妻直子の「過失に近い不義」をいかに描くか、また直子を赦そうとしても赦せない謙作の苦悩をいかに描くかで頭がいっぱひだつたと思ふのだ。で、当面の難事である「その妻の過

失に近い不義で苦しみぬく事」（「暗夜行路」後篇第四が「続篇」として『改造』に連載が再開されたのがなんと大正十五年十一月からであった）の「丁度その反対に、姦通され、それを怒るよりも、それから却て妙に細君をいとほしむ気持になる主人公を書」くというのが「雨蛙」の最大のモチーフだったと理解すべきなのである。ただし、これはあくまで「雨蛙」の男主人公贊次郎に焦点化した言説であって、最終的に夫婦和解となる「暗夜行路」と「雨蛙」が同じ結末になっていると見るのは早計ではないかと思う。ここでは「雨蛙」の女主人公せきが夫贊次郎にその姦通後、いやそれ以前からどのような思いを寄せていたのかなどについての作者志賀側からの言及は一切ないので、それは読み手、「雨蛙」を論じる際の大きな課題として残されていると肝に銘ずるべきだとしておきたい。

次に、志賀は、「雨蛙」のいわば草稿に当たるものに言及している。「一年程前」、我孫子で瀧井孝作や橋本基らと「廻覧雑誌」をやっていた際、「二晩か三晩で書き上げた」ものがあるという。それは次のような内容のものであったとする。「暗夜行路」の作者が沼に臨んだ庭の日当たりで寝椅子で新聞を読んでいるところに郵便屋が

来る。その中に「雨蛙」の主人公になった田舎の青年からの手紙」があり「総て手紙の態で、あれに書かれたやうに事情が書いてあり、「暗夜行路」の主人公（の未だ書かれてない仕舞ひの方）の気持と余りにかけ離れた自身の気持に対し、自身が無道徳者なのか変態心理者なのかしらといふやうな質問をしてゐる。さういふ形式で書いて見た」というのである。瀧井の評は「全体に大きい、ね、りがあつていい」（傍点は志賀）と褒めてくれたが、志賀自身は「如何にもお粗末な気がして少しも満足しなかつた」、それは「その頃自分はフローベールの「真心」（中村星湖氏訳。訳も大変いい）を見て此上なく感服」していたから、やがて「フローベールに肉迫するのだ」の意気込みで「雨蛙」の仕事に苦しみながらも取り掛かったというのである。

この辺の事情を志賀日記に当たってみた。大正十二年二月二日に「四時頃までフローベルを見る、感服する」という記事があり、中村星湖訳のフローベール「真心」を読み、感服したことをうかがい知ることができる。同年二月四日に「午后と夜少し仕事する、（雨蛙）」とあり、二月五日は「仕事」、二月六日は「仕事出来る」、そして二月八日には「雨蛙」は自分のものとして最もよき

一篇になるに違ひない、／今度程仕事を本統に楽しく充奮しつゞけ、不安なしに続けられた事嘗てなし、今度のものよく行けば、神品たるべし」と記載されているのである。

ところで、瀧井孝作の後年の回想によれば、「我孫子で、としの若い基君も木ノ検君も勝也君も、何か書きはじめて居たので、志賀さんと私と五人がその回覧雑誌をした。回覧雑誌の批評会するとき、志賀さんの原稿は、小説「雨蛙」の初めの所、小さい町の造り酒屋の主人公賛次郎一家と町の習慣など詳しく五十枚ほどの未完で、私は、「いろいろのことが書いてありますが、強い一貫したものが通つて居る感じがすな」と云つた」とあり、その後「何度も書き直されて」の「完稿二十枚余り」の『中央公論』掲載であったこと、そして「私どもの我孫子でみた「雨蛙」初めの五十枚ほどの未完の原稿は全く捨ててしまはれた」としているのである。

志賀が「回覧雑誌」に発表した「雨蛙」の草稿は、ある田舎の青年が主人公でその書簡が主体となっていて、その主人公が自分は無道徳者か変態心理者かと思ひ悩んでいることに力点が置かれており、一方の瀧井孝作の回想ではのちに完成された「雨蛙」でいえば主人公賛次郎

一家のことや日町の習慣の記述に詳しいものとして強く印象付けられていて、志賀のいう「雨蛙」草稿と瀧井の回想するそれとが同一のものであったのかという疑問さえ浮上してくる。両者の内容、作風にかなりの隔たりが感じられるからである。

そこで瀧井の「雨蛙」は一年半もかかつた」という証言を信ずれば、瀧井が我孫子に住むようになったのが大正十一年五月下旬のことであつたことから、この時点以降で志賀、木下検二、橋本基、高橋勝也、瀧井の五人が「回覧雑誌」を始め、瀧井によると志賀の出したのが「小説「雨蛙」の初めの所、小さい町の造り酒屋の主人公賛次郎一家と町の習慣など詳しく五十枚ほどの未完」のもので、それを読んだ瀧井が「いろいろのことが書いてありますが、強い一貫したものが通つて居る感じがすな」という評をした、このことだけが回想されたようにも思われる。そして大正十二年二月に「回覧雑誌」に出した「暗夜行路」の作者に宛てた田舎の青年の書簡を中心にしたものは、後年の瀧井の回想から漏れてしまったものか、瀧井の「全体に大きいうねりがあつていい」という評が志賀の記憶に残っていたものとも考えられる。ともあれ、現存しない「雨蛙」の草稿のことであり、瀧

井の「雨蛙」は一年半もかかった」という証言を最優先させると、このように見なければどうにも辻褄が合わなくなるのである。

だが志賀は、大正十二年三月に久しく住んだ我孫子を去り、京都粟田口に移住した。同年五月一日の日記に「枝蛙」を今月中に完成し、来月より「暗夜行路」を一つきに書き上げる事、という記事が見られ、「雨蛙」「枝蛙」と改題したものか）はなかなか完成には至らずにいたことが確認できる。春に京都へ引き移って、春の京都はどうしても遊ぶような気分になれ遊んでしまったが、それでも「初めの十枚ばかりを何度となく職人仕事のやうにいちづつてゐて、それより先へ進めなくなつた」という。大正十二年五月三十日付けの木下検二宛書簡に「僕は「枝蛙」かゝるとはとぎれとぎれでなかなか進まず今度こそ続けてやらうと思つてゐる、早く書き上げて長篇にかかりたいと思つてゐる」という記事があり、春の京都で「雨蛙」の書き直しに苦心しているのをうかがい知ることができる。

志賀は大正十二年十月末に宇治郡山科村に転居している。ここで集注力を働かせ「雨蛙」完成に向かったと推測される。その際、志賀には高次元の「註文」があつた

ことを披瀝している。それは「出来上つた「雨蛙」に書かれたやうに妻の気持の反射から、主人公が自身の慾情を刺戟されるといふやうな、そんな度強い気持ではなく、もつと淡い何となく夢のやうな美しさを持つた気持で、妻を堪まらなくいぢらしく思ふ、さういふ風に何処までもソフト・フォーカスに書きたかつた」こと、およびラストシーンで主人公がSやGの作物を裏山で焼く所は「描写」で書きたかつたが、それらが出来なかつたのは他の部分との整合性のせいだとしている。こうして結局は、「雨蛙」の後半は実に書くのが厭だつたが、原稿一切が迫り無理に書き上げたのだという。が、「然し出来上つて見て、註文には却々及ばないにしても、自分は初めて、その短篇に執着を感じ出した。以前のものと読み比べて、密度が余程異ふと思つた。「雨蛙」を見て前のものを読み返すと、如何にも淡々としたものだといふ気がした」としている。「以前のもの」、「前のもの」が我孫子での作かどうかは判然としない。ともあれ、書き直しを何度も重ねたうえでのもの（「牙彫とか詩絵とかの職人のやり方のやうなやり方で作つたもの」）だったので、『中央公論』に発表したものは、「密度」も濃く、作者側の高次元の「註文」通りにはいかなかつたけれども、

ある程度まで満足のいく作品、大変な力作、という自己評価であったとしていいように思われる。

志賀は、讀賣の江口渙の評に対しては、「江口氏は唯リアルでのみある事が物足りないといふ。さうかしら？自分は書かれた事が全然空想から来てる所からも、出来るだけはリアルに書かうとした。然しそれ以上に自分は美しく書いたつもりだ。美しく感じなかつたといふなら、それまでである」と反論、とりわけ江口が「無道德」の实在性不足を言ったことについて「自分は無道德といふ事には或る種の美しさがあると思つてゐる」、「あの女主人公が無道德であればこそ一種の美しさを持つてゐるのだ。そして無道德であればこそ男主人公にも道德的判断が先に立つて来ないのである。赦せるのである」と作のクライマックスシーンにおける、Gと関係した女主人公の放心状態、それは「無道德」の美というもので、それは十分描けたはずだとしたのである。東京朝日の武藤直治の評に対しては、「幅と広さと視野が狭く思はれる」は自分はさう考へない。反対に思ふ」としていることから、「雨蛙」は「幅」も「広さ」も十分にあり、「視野」の狭がりもある作品だという作者側の自負が感じられる。そして「批評家は先づ作者がどう云ふ要求から此の仕事

をしてゐるかをよく見抜く力を養ふ事が大事だ」といい、批評家不要論に近いものさえ吐露しているのである。正宗白鳥の批評については、「没分曉漢の評」ではないが、「雨蛙」に就いては雨蛙の条がわざとらしくて厭だといつてゐる。或程度に首肯するが、自分では題に雨蛙を選んだ方がいけないと思つてゐる」と反論している。ということは、電信柱に住まう夫婦ものらしい雨蛙を描いたシーンは、多分に見え透いた技巧だったかもしれないが、必要不可欠のもので意味深いものがあるとしたと理解したい。

三

「雨蛙」に対する文壇における反応は大正十三年二月になつても起こっている。

前田河広一郎は、「雨蛙」の冒頭部を「大変面白い」として着目するが、あとの展開には関心が向かず、新興作家諸君に「……さういふ町であつた。以下を、該博な都市農村の制度組織の知識と、深い人性の判断と、醸造家の生活に対する理解とをもつて、何とか、目新しい小説に仕立てなほして貰ひたい。さういふ原始的な、相

互扶助をする村には、もつともつと純樸な、共産的な、古代思想が残つてゐるにちがひない」(『正月文壇評 一月の小説について』、『早稲田文学』、大13・2・1)と論評している。これは「雨蛙」の冒頭部で描かれたH町に多大の関心を寄せた初めてのものとして注目してよいが、こういう冒頭部とあとの展開部分との有機的関連性を論じるべきで、それはのちの私による「雨蛙」読解に委ねなければならない。

豊島與志雄は、「志賀直哉氏は私の敬愛する作家であり、「雨蛙」は「正月に発表された多くの作品のうちでは、優れたものゝ一つであらう」としつつも、「全体として簡潔な隙のない文章で成立つてゐるが、所々に、混濁したきこちない句がはさまつてゐるのは、どうしたものだらう?」としてその具体的な部分を引用し批判を加え、「凡て藝術品には、藝術的誇張——と云ふのが悪ければ藝術的歪曲、といふものがある」、その「藝術的歪曲」が「雨蛙」には不足している、「全体として統一する雰囲気、非常に稀薄になつてゐる」、とりわけ雨蛙のシーンは「如何にもとつてつけたやうな感」を讀者に与えるのは、その描き方に「藝術的歪曲がないから」(『志賀直哉氏へ苦言』、『文藝春秋』、大13・2)だと批

判したのであった。

『新潮』(大13・2)は、徳田秋聲、加能作次郎、菊池寛、田中純、久米正雄、久保田万太郎、里見昶、水守亀之助(司会)で「雨蛙」の合評をしている。要点を抽出しておきたい。まずは「雨蛙」がリアリティーをもち得ているかどうかを話し合っている。講演会のあとあのような事件が起こるものかどうか、菊池寛は「僕は二十回近く講演旅行したが、あんな機会があり得るとは思へないね」、「あのシチュエーションは嘘だ。少くも本当らしく書けてゐない」と言い、田中純も「あゝ云ふ戯曲家や小説家が存在することは、幾ら作家の空想を尊重したつて許されない」、「全く非現実的だよ」とし、久米正雄も「全体がトリックすぎる」と発言している。だが、徳田秋聲は「本当らしく書いてある」、「女の性格は少し型にはまつてるやうだが、全体として実にリアリスチックに出でゐると思ふ」と言い、「本を焼くのはあの青年の心持がよく出してあると思ふ。それからあの村のこと、青年の生立ちなんかを、短篇としては長い間のことを書きすぎると思ふが、あゝ云ふ純潔な人生を現はしておいて、東京から行つた講演者の不道徳を余計響かせようとしたものかと思ふ」とかなり好意的な評をしている。水守亀

之助も合評のしまいの方で「講演会のことは僕は本当にあるのかと思ひましたよ」と発言しているのである。その水守は、合評の中盤で「雨蛙」のところの描写と、あの題材とは別々のものとして興味を持ったのを、それを無理に結びつけたところにギャツプがありませんか」と発言し、里見諒がそれに同調、「感じから云つても、その雨蛙と事件とはピッタリ来ない」としている。そういう里見は、菊池が「志賀氏として失敗の作だと思ふ」と言う、「然し野心的な作だよ」とする。久保田が「志賀氏はいままでと違つた「試み」をした。そしてそれに失敗した……」と発言すると、里見は「志賀君は冒険したんだ」としている。この大正文壇の錚々たるメンバーによる『新潮』合評会のありようから、総体的に「雨蛙」は「失敗の作」とされた感が強いようだが、徳田秋聲が意外にも好意的な評価をしていて、私はこの徳田秋聲の発言に注目すべきだと思つた。ともあれ、志賀の野心作、冒険作、新しい試みの小説としていい「雨蛙」の作品評価をめぐって、むしろこの合評会は困惑しているような印象を受けたのである。

以上のような「雨蛙」評に志賀はどのような反応を示していたのであろうか。志賀は、豊島與志雄の「苦言」

を読み、「少しも不愉快を感じなかつた」が、「左う教えられた気はしなかつた」といい、「あの材料は自分には却々手強い所があつた」が「結局どうか倒せた所に自分としては或る満足がある」(未定稿176)とした。また、豊島與志雄の「雨蛙」の文章に関する非難については、文章は「完全なものよりも何所不完全なものに興味を感じる」として意に介せず、「自分の註文が難物」だったのを「どうかかうか捻ぢ伏せた所に満足がある」(未定稿176)としている。これらは志賀の「雨蛙」に対する自信の所在を証明するものだろう。さらに、志賀は『新潮』合評会にも目を通していて、「雨蛙」の条はよく皆に非難される。これは新潮の水守君のいつた事が当つてゐる」、あれは「我孫子であゝいふ雨蛙を見て、興味を持ち、お伽噺やうのものの書き出しに面白いと思つて記憶してゐたもの」で「全体と充分に溶け合はなかつたやうである」といつつも、「雨蛙」は「全体的に見て悪いものではないと考へてゐる」(未定稿176)としているのである。

長々と、「雨蛙」発表に際しての文壇におけるその作品評価をめぐる様々な反応、それについて作者志賀が「雨蛙」執筆に関わり大変な労作であつた事情を打ち明

け、そして多くの批判を斥け、「雨蛙」は「却々手強い」材料、「自分の註文が難物」であつたにも関わらず、「どうかかうか捻ぢ伏せた所に満足がある」とした自信作であつたことの確認作業をしてきた。また、「雨蛙」を巻頭に十一作を収録した創作集『雨蛙』（改造社、大14・4）を刊行していることも志賀が「雨蛙」を自信作としていた証左となるだろう。

では、その自信を支えたものは何だったのかを想像してみた。志賀は、目指すべき芸術は、リアリズムが主体であっても、象徴的なものがふくまれていなければならぬとしていた（未定稿180、全集「後記」で紅野敏郎は「大正十四年二、三月頃の執筆か」としている）。小説芸術の場合も、リアリズム一点張りではなくそこに象徴的なものがふくまれていることを志賀は目標としていたに相違ない。その野心作、冒険作が「雨蛙」で、それはある程度まで成功していると志賀は自負していたのだと思う。ようやく「雨蛙」の作品世界の考察、私なりの解説の試みをする段階となつた。

四

先に、「雨蛙」の舞台となつているA市は明石市とし、H町をA市から北へ三里（約十二km）ということから明石郡榎谷村の福谷という集落を指しているだろうと判断した根拠を説明しておきたい。

A市は、城下町（作中に「昔藩主の別邸だつた清々園せいきんえんといふ料理茶屋」が出て来るので）であり、文学者の講演会を催すことが出来るほどの「市の公会堂」があり、「土地の女子師範の音楽教師」（山崎芳江）も出て来るのでA市には「女子師範学校」もある、としなければならぬ。また、地理的に、A市から北へ三里のH町を説明した部分に「冬の霜解」とあることから、A市は、冬は積雪がないこと、A市で水菓子屋をしている竹野茂雄のところから「遠くから届いたらしい林檎の箱」とあることから林檎の産地である青森や長野などの雪国に位置しないとしなければならぬ。さらに、小説の現在時において、年寄の車夫によれば、A市の郊外に工場が出来るらしいこと、それが「競売屋せうりや」の「赤地に白くメリヤスとぬいた大きな旗」と関係があるだろうということが想像

されるのである。

ある市史関係の文献^⑤によれば、明石市が市制を施行したのは大正八年十一月一日であったが、明治年間に遡れば、明治三十六年六月五日に明石女子師範学校が開校、翌明治三十七年三月十日には校名を兵庫県立明石女子師範学校と定められたこと、明治四十四年八月十三日にはその半月前に明石の中崎海岸に竣工したばかりの公会堂で夏目漱石が千余人の聴衆に「道楽と職業」という題で講演を行なっていたこと、また明石市となつてからでは、大正九年に日本毛織株式会社が神戸本店の一室にメリヤス試験部を設けてメリヤスを試作して良好な試作品を得ていて、大正十三年六月、日本毛織株式会社は明石工場（編立・仕上・染色の三工場）を建設し、大正十四年四月から相当大規模な設備をもってメリヤスの生産を開始したことなどが判明するのである。さらに、明石師範学校編集の資料^⑥によれば、大正十年三月三十一日付で赴任した三代目校長の志村伴次郎は、女教員独特の本領として「殊に音楽教育の如きは女教師が最も腕を振ふべき所ではなからうか」と述べ、音楽科の振興に大いに力を注ぎ、音楽会の公開を行なうにいたつた。「大正十年紀元節を卜して第一回音楽会を催したが聴衆堂に溢る、

盛況で、翌年は更に盛大であつた」（第一回音楽会は大正十一年二月十一日に行なわれ、「来聴者四百余講堂に溢れ非常なる盛会であつた」という）とされているのである。

以上で作者志賀が意図的に読者に特定されるのを避けるため「A市」としたのは実は明石市だったということがほぼ実証されたかと思う。作中の「市の公会堂」とは、かつて夏目漱石が講演をしたことがある「中崎公会堂」（修復されて現存する）であり、作中の「市一の旅館」である「迎雲館」とは、漱石も泊まったことのある「衝濤館」（相生町・昭和四年時点で営業収益一位・現存しない）、あるいは「錦明館」（大蔵町・昭和四年時点で営業収益が僅差で二位・現存しない）あたりが充て込まれたとすることができる。また、作中の東京で活躍していると見られる劇作家のSと小説家のGによる講演とは別に、山崎芳江という女子師範の音楽教師がその「いい聲」での「唄」（独唱だろう）の披露があつたとされているが、当時のA市（明石市）の土地柄からいえば不自然なものとはならないのである。

となれば、H町は、地理的に明石郡植谷村の福谷という集落でなければならなくなる。

ある市史関係の文献^①によれば、明治四十年八月十日、三輪信一郎が加古郡長から明石郡長に転任してきて、三輪は赴任とともに壮大な「明石郡町村自治体系」なるものを作成し、それを「町村是」として郡吏や町村長らに積極的に説いたという。特にその自治制度の思想の中心に「教育勸語」を据え、自治の基礎として「家」の役割を強調したのだという。郡青年会や戸主会を設立、「明石郡内町村戸主会会則における実行事項」として、「農業および経済発達をはかるため産業組合を設立し、村内共同一致の推進」や「災害予防への留意、災害時の応急防禦についての相互援助」などが明記されていた。近年刊行された榎谷町の歴史と民俗に關した著書によれば、榎谷町は、「榎谷川にそって、上流から、寺谷・友清・福谷・長谷(はせ)・栃木・谷口・菅野・松本の順で各集落が続」き、友清を除く他のすべての集落をほぼ東西方向に貫いて「県道小部明石線いわゆる「榎谷街道」が走行する」としている。私独自の調査によれば、現在の「県道小部明石線」(明石市内から神戸市北区鈴蘭台までの前身である「県道押部谷明石線」(明石郡押部村と榎谷村を経過して明石市を結ぶ)は約十二km延長されて大正十二年四月一日に「県道」として認定されたものであ

る。従って、それよりかなり以前から、明石市から北上し、なだらかに東西に走る「いわゆる榎谷街道」が「県道」として認定されていたのは確かだろう。今問題の福谷は、前掲書によれば、「押部谷高和と伊川谷前開を結ぶ位置にあり」、福谷を南北に走る道は、かつては「平野福谷前開道」といい、「日露戦争のときから何年もかかって作りあげた道」で、現在では「県道神戸加古川姫路線」として整備されているという。ここでいう「平野福谷前開道」とは、福谷集落を縦に貫く道が元々あって、それが北の平野と、南の前開とに延長されて結びつけられたものと見てもいいだろう。また前掲書によれば、榎谷町では「戸主会」や「隣保」があり、各地区それぞれ共同仕事(用水路の掃除や草刈り仕事など)があったとしている。さらに福谷村に關する別の資料によれば、「頼母子講(明治になりますと福谷信用組合に発展しています)などの、講(銀行)の制度が生まれました」という記事が見られるのである。

以上のことからすれば、「雨蛙」冒頭の「A市から北へ三里、日といふ小さな町」(傍線は引用者、以下も同様)は、地理的に明石市から北(正確には北北東)へ三里(約十二km)は榎谷村の福谷という集落に相当するこ

とになり、「町には昔から一つの組合があり、それで互いに助け合あつた」ということ（作中では、或る家が焼けた場合、家の再建に用材は共有の山林から得、労力も一軒から何人として寄附され、普通の半分の費用も要らず、また組合の同意を得れば経済的な困窮者は低利資金を借り出す事さえ出来たこと）、さらには「県道」（いわゆる櫛谷街道に当たろう）よりも「町を縦に貫く道」（「平野福谷前開道」の前身に当たるものだろう）が「立派」で、具体的にいえば「左右へ入る小路」には「人の歩くだけは一筋に平石が敷いてあつた」というのも、実在のモデルがあつてのもののように、決して架空のものではなかつたとしなければならぬ。また、そうであるならば、日町は、この冒頭部ではその文脈の底深く沈み込んでいるが、「教育勸語」の思想（父母への孝行、夫婦の調和、友愛の大切さ、博愛の実践、人格の向上、遵法の精神など十二の徳目が列挙されている）が浸透した道徳的に模範的な村落共同体としてあつたことも念頭に置く必要があるかもしれない。

ここで何故、志賀直哉と縁もゆかりもないと思われる明石市や櫛谷村が「雨蛙」の舞台設定のいわば下地となつたのかを推測してみたい。倉田百三は、その年譜^①によれ

ば、大正六年六月に『出家とその弟子』を岩波書店から刊行し一躍有名になつたが、病弱のうえに肋骨カリエスなどを併発し、福岡（大正七年七月に九大病院の診察を受けるが武者小路実篤の新しき村の創設に関係し福岡支部を作っている）、京都と移り、大正八年十一月から翌大正九年十月までは明石市に在住したのである。この明石市在住期において倉田は当時の明石市やとりわけ櫛谷村に関する情報を得ていたに相違ない。そこに、長與善郎が倉田の戯曲「俊寛」などに感心していて、長與が倉田へ初めて出した手紙に対する厚意ある返事が明石の療養所に移っていた倉田から届き、やがて大森に移つた（大正九年十月以降）倉田との親密な交遊が始まつたと回想^②していることを併せ考えたい。明石市や櫛谷村のこと（倉田が明石市を去つた大正九年十月以降のことも明石市の知人などを通して齎されていたとしてもいいだろう）は、いわば情報源である倉田から長與に話題提供され、その長與からやがて志賀に伝達されていたのではなからうか。先に見た我孫子での「廻覧雑誌」時代の瀧井が回想する志賀の「小説「雨蛙」の初めの所、小さい町の造り酒屋の主人公賛次郎一家と町の習慣など詳しく五十枚ほどの未完」のものがあつたこと、さらにその後

も志賀が「雨蛙」冒頭部執筆に苦慮していたことを思えば、倉田から長與經由によると推測される小説に使える材料は、数度に渡り長與から増補などされ、志賀に提供されていたのではないかと考えられる。志賀が「雨蛙」完成間近と思われる頃に長與に出した書簡（大正十二年十一月二十八日付けのもの）には、「……中央公論に出した短かいもの前にも予告したが君に捧げた。短かいものだが僕としてはかなり力コブを入れたものだ」とあり、とりわけ「雨蛙」のA市やH町を描くに当たって長與にいわば感謝の思いを感じていたので、「長與善郎兄に捧ぐ」という献辞が「雨蛙」になされた、と解するのが妥当のように思えるのである。

次に「雨蛙」の時代設定について考察してみたい。その手掛かりとなるものを作中に捜すと、贊次郎がせきと結婚して「間もなく」、せきが妊娠した年はいつかということになる。せきは妊娠したが、「その五月目、丁度秋の末、流感（流行感）はやはり」、せきがそれに罹って、周囲の人々が妊婦のせきを氣遣い、せきは胎児を流産したがそれきり直るもの、せきの身の上を一番氣遣った姑親（贊次郎の母）が同じ病氣（流感）に罹り、肺炎に進みついに亡くなるという出来事があったと叙述されている。

この猛威をふるった流行感冒は、のちにスペイン風邪といわれているもので、世界中で多くの死者を出し（約二五〇〇万人以上ともいわれている）、日本でも大正七年五月に上陸してから秋には死者は激増し死者約七万人（島村抱月がこの流行感冒に罹り、咽頭カタルと肺炎を併発して急逝したのが大正七年十一月五日のことであった）と発表されたが、最終的にはその死者は三十八万人を数えたという。では「雨蛙」の世界でこのような不幸があった年は大正七年の秋だったのであろうか。先の明石市史の文献（註）によれば、大正八年、「この年の末から翌年9月にかけてインフルエンザが大流行して死者が多かったです」とされている。となれば、A市（明石市）に近いH町に流行感冒が猛威をふるったのも、大正七年秋ではなく、大正八年秋と見た方がよいのではないかと思われる。そして「その時から今に三年が経つ」とされ、小説の中心を成すいわば迎雲館事件がその年の十月に起こったのである。よって、「雨蛙」の小説の現在時は、大正十一年と見るのが妥当だと思われるのだ。

以上のように、「雨蛙」における舞台設定についてA市を明石市、H町を明石郡榎谷村の福谷集落と見、時代設定についてはその主要をなす現在時として大正十一年

秋と見立て、その「五十年前」に贊次郎の父が亡くなっている。贊次郎が「急に一家の若い主」となった頃（大正五、六年）に小説の時代設定の起点が置かれている、と私は解説したい。そう見ること、A市で女子師範学校の音楽教師を勤める山崎芳江女史が大きな勢力を持っていることも、おそらくメリヤス製品であろうその工場がA市の郊外に近々建てられるということなども得心の行くものとなるのである。志賀直哉が「雨蛙」執筆に関し、「牙彫（げぼり）とか蒔絵（まきゑ）とかの職人」の仕事のように手間を食い、大変な苦心作であったとするのは、まずはリアリズム文学として「雨蛙」を仕立てるためという事情があったことを理解しなければならぬ。だが、「雨蛙」はリアリズム一点張りのものではなかった。リアリズムに加え、サンボリズムが作品全体に張り巡らされていたと見る。その辺を中心に「雨蛙」の作品世界を読み込んでいきたい。

五

次に、「雨蛙」作中の主要人物である贊次郎、その親友の竹野茂雄、贊次郎の妻せき、竹野の妻、山崎芳江、

劇作家のS、小説家のG、それぞれの人物像の造形のあり方などについて考察してみたい。その際、作中人物の命名のあり方などは、決して恣意的なものではなかったはずなので、私なりの考察を巡らしてみたいと思う。

贊次郎は、その姓は不明だが、H町の中程にある「美濃屋（みや）といふ造り酒屋」の「若い主（あそじ）」である。「美濃屋」という屋号から美濃（岐阜）の国を連想してしまうが、これもH町を特定されるのを避けたものと思われる。とはいえ、贊次郎一家の遠い祖先が美濃の国と関係があったとも思わせる。それに、これは後述するが、「せき」という嫁が「美濃屋」に入ったことは、ある象徴性を持つことになったと考えられる。

贊次郎は、「人児（ひとこ）」とされる。「次郎」と付いているので、天折した兄が一人いた可能性もあるが、それは語られていない。それはともかく、この当時「家」が重視されたことから、贊次郎は「美濃屋」の跡取り息子としてその将来が定められていたとしていい。そういう贊次郎は、「父の意嚮」で「農科大学」（初出は「理科大学」）を卒業してから家業を継ぐはずだったのを、今から「五十年前」に父に死なれ、「祖母の考」から、その中学時代に「市の寄宿舎」から呼び返され、「急に一家の若い

主」になったというのである。つまり賛次郎は、中学中退者^⑤として読まなければならぬ。中学の中退なら、賛次郎の年齢は、多く見積もっても数えの十七歳頃とするのが妥当で、小説の現在時はそれから「五六年」経つただから、数えの二十歳をわずかに過ぎたばかりとなるだろう。それ故に「若い主」と強調されているのである。

日町に帰ってからの賛次郎は、その生活を「幾らか単調」に感じ出すと、文学（詩歌の創作方面）をやっている親友の竹野の影響が現われ始めたという。ただし、竹野と同じように詩歌を作ろうとは思わず、「文壇の消息通」とされる竹野から当初は「さういふ話」を聴かされても関心がなかったのを、やがてA市に出るたびに「さういふ読物」を買って帰るようになったのだという。「さういふ話」の具体的な内容も不明のままである。が、竹野が詩歌方面とすれば、賛次郎は小説や戯曲方面の文学に興味を持つようになっていたと解していると思うのだ。こうして、竹野の結婚、賛次郎の結婚（祖母から言い出されたものだが以前から遠縁の農家の娘せきを好んでいたのも二もなく承知した）が語られ、せきの懐妊と流産、その母の死があって「その時から今に三年経つ」とされる。家業の方はそれまで「白鼠」の岡蔵が実

権を握っていたと見られるが、その岡蔵が中風の病気で故郷に去ったあとは、「氣丈者」の祖母が「家事、商事、総てに采配」を振るうようになり、賛次郎はまだ「一本立ち」が出来ずにいる、いわば名ばかりの「主」であったとしていい。そういう状況で、賛次郎の「文学趣味」が「少しづつ冗じて来た」のも当然のことのように思える。座敷に「大きな本箱」が据えられ、「新刊書」が溜まるのを楽しみ、自身でも「短い文章」を作り、竹野に見て貰っていたのである。その「大きな本箱」には小説家Gや劇作家Sの本もふくまれていたことは言うまでもない。さらには、妻のせきに文学の教養を与えたい、それは無理のようにも思えたが、「一人では何となく淋しいので、夫婦共有のものとして「文学趣味」に浸ろうとしていたのである。

ここで賛次郎と命名された意味を考えてみたい。「賛次郎」の「賛」には、「父の意嚮」、ついで「祖母の考」（中学を途中でよして一家の主になることとせきとの結婚を言うこと）に従順に「賛成」していることから、まずは素直な性格の意がふくまれていたとしていい。また、私一個の見方に偏向しているかもしれないが、「賛」は「惨事」や「悲惨」の「惨」と音のうえで繋がりが、この

小説の結末、およびその後の贊次郎のことも予測させるものとして含意されていたように思う。

竹野茂雄は、贊次郎と同じ日町で生まれ育ち、おそろく同じ中学に進み、さらに東京の私立大学の文科に入り、詩や歌を作り「青葉」という号を持つ文学青年で、やがて投書仲間の東京の水菓子屋の娘との自由恋愛から結婚したく思うが、「文学をやる女」を第一に嫌った茂雄の「年の大分違つた長兄」（竹野家の実質的戸主）の反対にあって、「家」と絶縁してA市でその女性と所帯を持ち水菓子屋をして自活しているという男である。竹野は詩歌方面の創作にいそしむ。竹野茂雄という命名のあり方に、『赤光』（東雲堂、大正二年十月）や『あらたま』（春陽堂、大正十年一月）や『赤光改選版』（東雲堂、大正十年十一月）を刊行して高い評価を得て大正歌壇の中心にあった斎藤茂吉の「茂」が充て込まれているという見方もできるのではないかと思う。むしろ「竹」や「青葉」から生命力に溢れる活動的な性格の含意もあっただろう。だが「雨蛙」の世界の解説のうえで、竹野が詩歌の実作をしていることは別に、竹野が「文壇の消息通」であることに大いに注目しなければならないと思われる。

竹野の妻については、その名前は示されない。「東京の水菓子屋の娘で美しいといふ方ではなかつたが、若いにしては心のしつかりした女だつた」とされている。外見上の女としての魅力には乏しいが、内面上、倫理的、道徳的な面では「しつかり」していたとしていい。竹野とは投書仲間「文学をやる女」であるが、ここで「文学」の性質を押さえておく必要がある。一口に「文学」といっても、その人生や生活に効用ある菓の面とその逆の毒の面を持つのである。竹野の妻は、健全な「文学」を嗜む、年齢的には「若い」ので悪影響を受ける可能性も大きいのだが、そうではない「心」の強さを持つ女性として造形されているとすべきなのである。

繰り返すが、贊次郎は、詩歌創作には関心がなく、竹野がしばしば聴かせてくれるおそろくは小説や戯曲や評論などのジャンルを中心とした「文壇」の「消息」から漸次、文学に興味を持っていったのではなからうか。想像を逞しくすれば、武者小路実篤の新しき村運動（大正七年）をめぐる諸発言があったこと、島村抱月の急死のあと松井須磨子があと追い自殺をしたこと（大正八年一月）、倉田百三の『出家とその弟子』（岩波書店、大正六年六月）、暫くして『愛と認識の出發』（岩波書店、大

正十年三月)や賀川豊彦の『死線を越えて』(改造社、大正九年十月)などの宗教学がベストセラーとして流行したこと、菊池寛の初めての通俗長篇小説「真珠夫人」(大正九年)がベストセラーになったこと、「花袋秋聲生誕五十年記念祝賀会」(大正九年十一月)が催されたこと、数々の文学作品が演劇化され上演されたことなどが「文壇の消息」として齎されていたとすることができるとはなからうか。そう読むことで、志賀の武藤直治の時評に対する「幅と広さと視野が狭く思はれる」は自分はその考へない。反対に思ふ」という自信に満ちた反論の意味も理解されねばならないように思う。

せきの人物造形については、次のような文中の描写部分を仔細に検討することから始めねばならない。

せき、と云ふ名だつた。無口で余りはきくしなない、学問のない、然し誠に美しい田舎娘だつた。脊丈のな
い事を当人は苦にして居たが、四肢の均等した発育が、それを少しも醜く見せなかつた。首から上の小さい、
髪の毛の豊かな — 髪は少し赤かつたが、 — 皮膚の滑かな、鼻の形の正しい、そして全体に如何にも
クリクと肉附に弾力のある事が見るから健康さうな

感じて、何人にも一種の快感を与へた。一つ当人の知らない欠点を云へば茶色の勝つたその眼に光がなかつた事だ。

右のような描写部分を引用し、曾野綾子は「その眼に光がないことは何を意味していたか。当時どこにでもある日常性、或いは女的美徳として捉えられていた、せきの、途方もない人困らせな正直さ、極度の表現力の乏しさ、不気味なばかりの意志のなさ、を描いて、余すところがない」と絶賛しているのである。換言すれば、せきは自我の抑圧を強いられる日町という近代化の進まない田舎の名家と思われる「美濃屋といふ造り酒屋」の跡取り息子の嫁として相応しい女性としてまずは描かれたということになる。さらに補足すれば、せきは外形の美しさを唯一の美点とされがちだが、「何人にも一種の快感を与へた」ということも見逃してはならないだろう。そもそもせきは、祖母が贊次郎に相応しい嫁としたのであり、のちにせきが妊娠し流産に罹った際、周囲の「人々」(職人達や女中など)は氣遣い、とりわけせきの上を一番氣遣ったのは「姑親」であった。その「姑親」が同じ病氣に罹り、肺炎に進んで亡くなってしまふという不幸

を招いたが、その「姑親」や祖母たちにも好かれていたのである。

せきは、いわば美しい人形のような存在であった。夫や目上の家人たちには常に従順であった。先行論のなかに「せきは、おそらくこのような旦那からほとんど出ることなく暮らして来た女性なのだろう」という唐澤聖月の指摘がある。それは、せきが贊次郎に連れられ山崎女史の唄を聴いたことがまだなかったということがのちに判明することからも、当を得たものだったと思う。せきが贊次郎に言われるまま一人でA町に行くことになる小説の設定は重要で、それでせきは変貌する。また、小説本文でせきに傍点が常に付されていること(四十九ヶ所)から、その命名の意味、含意するものを読み取ることが重要となる。「せき」には「関所」の「関」を読む張蓮の見解がすでにあり、のちのA町への越境行為からして当を得たものといえるが、「関」のほかに「赤」、「石」、「責」、「寂」、「堰」などを充て込むことも可能だと思う。「赤」という色は、多義的な意味を持つが、その一つに、情熱^⑧、烈しいものを連想させ、また象徴していよう。先の本文引用部でせきの「髪は少し赤かつた」というのは、その描かれぬ内面に、情熱、烈しいものを秘めている

ということではなかったか。また、「石」はその無機質性、無感動などに通じるものだと思う。先行論に、せきの流産罹害による流産から三年を経過しても妊娠しないことから、せきを「妊娠できない妻」とし、それは後半の展開が成立する条件(姦通されたせきを贊次郎が安心して「いとほしむ気持になる」ために性から妊娠という要素を取り除く必然性があったため)としたものがあり、後続論文でもせきを「妊娠できない妻」としているのが殆どなのである。だが、果たしてせきは「妊娠できない妻」であったのか。「雨蛙」では「――その時から今に三年経つ。せきはもう妊娠しなかつた」と叙述されている。「妊娠できない」身となつたとはしていない。では、せき流産後の空白とされた三年間の贊次郎せきの夫婦はいかなるものだったのだろう。大胆な予測をすれば、贊次郎は「文学」趣味に漸次のめり込み、その性生活は淡泊を極め、せきは「石」のような状態となつていて、あるいは今風にいうセックスレス夫婦状態であつたのではないかと思う。「気短な祖母はよくその事を口にし、贊次郎に苦い顔をさせたが、当のせきは却つて気にも留めなかつた」という叙述部にも注目したい。せきが妊娠しないことに祖母がやきもきしその事に言及するのは当然

なのだが、贊次郎が「苦い顔」をするのは何らかの理由があったからで、一方のせきには「責」がない故、「氣にも留めなかつた」となるのではないのか。私は、せきには今後妊娠する可能性はあったと解する。これは後述するが、せきの妊娠の可能性を残して置かないと、かえって「雨蛙」の後半部の展開において「幅と広さと視野」が狭くなってしまふのである。さらに「氣丈者の祖母」が「家事、商事、総て」に采配を振るっているので、贊次郎は依然として「一本立ち」できないままの「若い主」で、せきも「家事」の主導権を握れない未だ見習いの状態にあったと思われる。贊次郎は「文学趣味」を加速させるが、元來学問のないせきに「文学趣味」を夫と共有することは無理だったといえよう。せきは、贊次郎のいわば美しい人形妻として、外出も殆どままならず、いわば箱入り妻として「寂」しい生活を送っていたのではないかと想像されるのである。

ここで、贊次郎夫婦と竹野夫婦を比較対照して考察しておきたい。おそらく「雨蛙」完成前後の大正十二年（十二月七日）の執筆時としていいものなのか（『志賀直哉全集 補卷六』、岩波書店、二〇〇二・三、「手帳16」九八頁〜九九頁）に、「弱者を意味する善良は讚美した

くない、その意味で「雨蛙」の主人公二人を自分は讚美してゐない」、「二人は善良である、然し弱者であつて賢くない」、「今の世で健康といふ事はバイキンに対して抵抗力のある身体を意味するやうに悪に対して抵抗力のある善良でなければ悪の爲めに直ぐ打負かされて了ふ、

「桃源」は善良なる弱者の寄合ではならぬ」という記述が見られる。これは、社会（共同体）と文学の關係に置換して読むこともできるものだと思う。つまり、「文学」は、善と悪（バイキン）の両面を持つもので、贊次郎の文学の撰取の仕方には文学の毒（バイキン）に対する抵抗力がなかった、妻せきにもそれが感染していくと作者はしているのではなからうか。この記事には竹野夫婦への言及はない。だが、竹野は詩歌の創作を主にしており、その妻は文学の毒（バイキン）に対する抵抗力のある健全な「しつかりした」「心」を持ち合わせているのである。竹野は「文壇の消息通」でそういう話を贊次郎に聴かせていた。家業で「一本立ち」出来ずにいる贊次郎はA市に出掛けるたびに、善も悪（バイキン）もふくんだ「文学」を撰取していった。こうして贊次郎夫婦に「慘事」が襲うのである。このように、贊次郎夫婦と竹野夫婦の対照を把握したい。

六

山崎芳江、脚本家のS、小説家のGは、竹野の細君が夫の茂雄に話したことをもとに竹野が贊次郎に迎雲館での出来事を語る形で描かれている。この三者の人物造形を考察するに当たり、まずは生井知子の指摘註により「雨蛙」の第一稿としていい、「大正五年八月廿九日未明」執筆と見られる「馬鹿者の夢（逆さに書くにふさわしき）」と題する記事（『志賀直哉全集 補巻六』、岩波書店、二〇〇二・三、「ノート13」二八七頁〜二九〇頁）に触れておかねばならない。

これは夢のなかの話だが、以下その内容を私流に書き紹介したい。自分（志賀）は、あとで思えばゴリキリーの演説会か何か（中止になったが）から麻布の家に帰って来た。そこで会う筈の妻（康子）はもう帰っていた。夜、自分は妻を抱こうとしたが、妻がいやがった。妻は何か独り心のなかで嬉しい気持ちを繰り返している。直覚的嫉妬を感じた。妻はゴリキリーと関係して来たのである。妻はそれを言うのに殆ど悔恨の情を見せなかった。自分は前に所謂「新しい女」的行為に同情を持つこと、

すなわち貞操の解放というものを代表的な「旧い女」である妻を驚かす興味から話したことがあったように思った。それを妻は真に受けて実行したのだ。自分はJ子さんと妻を遊ばせておいたのが失策だったと思う。J子さんは独逸の或る小説家（どこかシュニッツラーに似た所のある顔をしている）と姦通していた。そのJ子さんの手引きで妻は出掛けJ子さんに勧められて、衝動的にゴリキリーと姦通したのだと思った。妻はもうこんな事はなれと言ったが、自分はゴリキリーとまた会う機会があれば駄目だと言った。こうして自分は妻との離縁を決心する。妻はまだ新しい胸の喜びを味わいつつあるのが知れる。手紙を武者小路に書くから彼の所へ行けと言う。が、離縁状というべきものを書くその紙が見当たらない。祖母は紙がないのは離縁しない方がいいという暗示だとして止める。が、自分はそれを受け付けず、学習院の或る所に白紙が一尺くらい積んでいたのを思い出し学習院に出掛けた。もう二十年前の松方義輔や毛利八郎らに会う。毛利が妙な虫を沢山集めて喧嘩させている様子を見、自分はイライラして苦しんでいるに関わらず、大きな声を出して笑い、その声で夢はさめた。

このような夢の内容から、これが「雨蛙」の原型になっ

ていることは明白である。ここでの「自分」が贊次郎、「妻」がせきに大きくデフォルメされていったこと、A市や日町のこと、また贊次郎の親友竹野茂雄とその細君に当たる人物に相当する人物がここには見当たらないので、のちに設定、造形されたことが判明する。問題は、山崎芳江に当たるJ子さん（実在したと見る）が思い当らない。が、J子さんは「自分」の知り合いのようであり、山崎芳江はのちにこのJ子さんにデフォルメを加えて設定、造形されたとすることができらう。さらに、劇作家のSがシュニッツラー、小説家のGがゴリーキーにそれぞれ当たるのだと確認できる。だが、「雨蛙」は日本の大正期の話なので、Sをシュニッツラー、Gをゴリーキーとして解読しただけでいいものかどうかという問題が残るのである。

山崎芳江は、男関係に奔放で、Sとの関係もそれを知る者には「寧ろ公然の秘密」で、A市での「評判は余りよくなかつた」が、「その豊かな肉体と声と派手な性質とでは、今は此市になくなくてはならぬ女のやう若い連中れんぢゆうからは思はれてゐる、さういふ女だつた」と語り手はいう。これはどういうことか。旧弊な考えの人たちには評判はよくないが、所謂「新しい女」として、しかも先に触れ

たようにA市の公会堂では、その日、SやGの講演とともに芳江の「唄」（独唱だろう）があつたのであり、開明的で進取的なA市の「若い連中れんぢゆう」からは支持を得、人気もあつたとしていいのである。その命名のあり方を検討すれば、「山」は、彼女が贊（山を充て込むこともできる）次郎同様、おそらく山間部の出身であるだろうことを思わせ、「芳江」の「江」には「葦」が生えるもので、「葦」が「悪アし」との同音を忌んで、ヨシとも言う^②とあることから、「芳」になつていて、と解すことが可能である。つまり、山崎芳江は、善と悪の両面を持ち、他者から極端な好悪のいずれかで見られる傾向にある女性として造形されている、とすることができるのである。

Sについては「色の白い、眼の優しい柔かい髪が広い額を斜に隠し、物云ひも丁寧に、声も小さく、動作まで何処か女らしい感じを与へる男だつた」とされている。それとは「反対」に、Gは「眼、鼻、頤、首、総てが強い線が^③つしり描かれ、肩幅もあり全体嚴丈で、何となく力強い感じに溢れてゐた」とされる。SとGは、その人物像において対照的な造形が施されているといえる。先の「馬鹿者の夢」が踏襲されたとすれば、Sはシュニツ

ツラー、Gはゴリーキーということになる。が、そういう要素は否定できないにしても、ここは日本が舞台なのでSとGに別のものや人物を見なければならぬだろう。Sは、繊細さ、精緻さ、しとやかさといったイメージとなる。Gは、剛(豪)の者、剛(豪)胆さ、がっしりとしているといったイメージとなる。だから、竹野の妻にはGの人間性と文学に強さはあるが毒(バイキン)も多量に持ち合わせていると直観的に察知し、「何となく恐ろしく思われた」のではなからうか。しかし、こう解説しただけでは物足りないものがある。作者志賀は無意識のうちにも、SやGの頭文字を用い、実在の大正文壇の文士を想定できるようにしてしまったといえないだろうか。ここに、赤木桁平が「遊蕩文学の撲滅」(『讀賣新聞』大5・8・6、8、これが契機となって文壇では遊蕩文学撲滅論争が起こった)で遊蕩文学の代表者として挙げ糾弾した近松秋江(S)、後藤末雄(G)が充て込まれていたとはどうだろうか。むろんこれは偶然の一致、不思議な暗合であろう。志賀は「和解」(『黒潮』、大6・10)をけなした秋江に激怒し、反駁文を書いていたが筐底に秘していた。志賀と第二次『新思潮』出身の耽美派作家の後藤末雄との関係はよく分からないが、『白樺』

派文学を高く評価、とりわけ志賀直哉を一番高く評価していた赤木桁平(『新進作家論——『白樺』派の諸作家——』、『文章世界』、大5・2)にとって、近松秋江や後藤末雄は「悪文学」の代表となっていたのである。このように「雨蛙」のSなる劇作家とGなる小説家を暗に大正期に実在した作家と見立てることが許されるなら、実際の大正文壇のありようの一齣まで作品の底に塗り込まれていたとすることが出来るように思うのだ。

七

せきの流産、「姑親」(贊次郎の母)の死から三年を経過した年の秋が小説「雨蛙」の現在時である。ここからは、贊次郎せき夫婦に焦点を当て作品読解をしていきたい。贊次郎についてはその内面に立ち入った語り手による描写が時々なされている。が、せきの場合、外面描写だけである。その仕草、行動、とりわけ眼の表現が多いのも特徴だが、それらに留意して、せきの内面を忖度、推測することをしてみたい。また、小説のいわゆる「小道具」としてあるものから、その象徴性を読み取る試みもしてみたいと思う。

贊次郎は、SやGの講演会がA市であるので「是非来るやうに」という誘いの葉書を竹野から貰った。その返事にせきも連れていくつもりなので「一泊させて貰ふかも知れぬ」と書いていたのだった。その日が来た。「十月にしては晴れて居ながら、いやに生温かい風の吹く日だった」とされる。志賀文学では天候で小説の先の展開を暗示させることが多い。そして、祖母が不意に倒れたのである。が、ここで注意したいのは、贊次郎が出掛ける支度（講演会に行くのだから身だしなみに気を付けていたはずである）の手伝いをしているのが祖母であるということである。妻せきではないのだ。そもそも祖母は「家事、商事、総てに采配」を振るっていた。妻せきの役割、存在の意義が殆ど見出せないのである。せきは「寂」に通じ孤独だったとしていいだろう。さらに贊次郎は祖母の看病を雇人に任せられない、自分がすると決める。こうして、せき一人で講演会に行くように指示する。せきは「へい」と言うだけが、二度目に「へい」と答える際は「無心の眼差し」を向けていたのである。ここの「無心」とは、意思や感情などの働きのないことをいうのだと思う。先にも述べたが、せきは、いわば箱入りの美しい人形のような嫁で、夫の言には一切逆らわ

ない忠実な下僕、ロボットのような存在だったのである。贊次郎は俵で出掛けて行くせきの後ろ姿を見送っている。「今は田舎でも余り見かけなくなつた廂髪を揺られながら、生垣の続く、長い一本道をせきは一度も振り返らず、段々に遠ざかつて行つた」のである。ここの「一度も振り返らず」という行為が気にかかる。せきとしては、いわば晴れがましい場に行くので不安でいっぱいだったろう。贊次郎から、まずは竹野夫婦の所へ行くよう車夫を通し指示されていたのかもしれない。せきは竹野夫婦とは面識はあつただろう。せきがH町から出ることはなかつたとしても、その結婚式、「姑親」の葬儀、その他の法事などで竹野夫婦がH町の贊次郎とせきの所に立ち寄ることはあつたとしていい。だが、せきと竹野夫婦は親密な関係にはなかつたと見るべきである。こうして、頼るべき夫の贊次郎にその不安、心配を打ち明け甘えることすらしていない。その後の贊次郎は、「時々せきの上」を思っている。「大勢の聴衆の中に吞まれ切つて居る妻の姿を想ひ浮べるとせきがさう云ふ場所に余りに不調和な人間だつた事を今更に想はれた」とするのである。これは贊次郎の軽率で暴君的な指示だつたともいえるだろう。せきはおそらくA市に初めて赴くのだと思われ、

「関」を越え、あるいは「堰」を切り、贊次郎が翌日せきと再会した場面では、せきは、明治三十年代から大正初めに流行した「廂髪」から大正末期に流行する「耳隠し」の髪型の変化で登場して来たのだった。その晩は、贊次郎は「何年振りかで」祖母と同じ部屋で枕を並べて寝たという。ということは、それ以前、少なくともその結婚以前は、祖母と同じ部屋に寝たことがあるということである。どうやら贊次郎は、祖母にとりわけ愛されていた一人息子で、妻せきよりも祖母への愛情が優っていたとさえしていいように思えてくる。この辺にもせきが夫贊次郎を愛し信頼しきれないものがあつたとすることができるように思える。で、その晩は、「変に蒸々と寝苦しい晩」となり、風は静まったが、ぼつりぼつり降り出した「雨」は「段々烈しくなつた」のである。「雨」について、信頼できそうな或るシンボル事典(註)を参照すると、二つの面の象徴性があるとされ、こゝはむしろ「苦痛あるいは不幸をもたらすものとしての雨」ということになる。

翌日は、晴天となつた。ただ、「風は北に変」つていて(前日は南風だつたと解釈できよう)、「急に寒くなつた」ことに注意したい。だから贊次郎は、せきの為に

「肩掛け」を持って行くことにしたのである。むしろ、祖母は快方していた。ここで贊次郎が祖母に、A市行きに際して、せきを迎えに行く目的の一つではなく、「買物もあるし」と、もう一つ目的があるとしていることに留意したい。「買物」とは何か。本であろう。前日、贊次郎は祖母の看病をしている時、病人の枕元で本を読んでいた。文学趣味がせきの身の上を案ずるよりも凌駕していた印象さえ与える。贊次郎は、自転車を走らせ、A市へと向かう。北風なので追い風となっている。雨上がりあとの道や草木、「薤つづきょうはだけ畑」の「紫の花」が「黒い濡土」と共に大変美しく見え、遠い空で「雁」が淡い一列で動いているのにも目が向いていて、贊次郎は爽快な気分であつたのだ。ここで先走つたことをいえば、志賀直哉得意の対照描法が用いられているとして、のちにA市からH町にせきと一緒に帰る復路は、逆風となり、その気分も憂鬱なものにならねばならないのである。

贊次郎が竹野の水菓子屋の店先で自転車を降りた時、竹野は「遠くから届いたらしい林檎の箱」を、俯いた姿勢で力を入れていたせいだろう、顔を「赤く」して開けていた。この箱の中の「林檎」の幾つかが、のちに竹野の細君から贊次郎せき夫婦への土産品とされる。「林檎」

の象徴性は重要なのでちに考えたいが、竹野は賛次郎の姿を認めると、「当惑の色」を浮かべ、前夜は、せきが迎雲館に泊まり、今ここにいないことを告げた。賛次郎はこのことに驚くが、「せきと迎雲館」（賛次郎をふくめ日町在住の者には足踏みならぬ高級旅館として迎雲館はあった）の「対照」、それが最初は「甚く滑稽」に映り、やがて竹野の「何か事ありげな気配」で「直ぐ不安」となるのだった。こうして賛次郎は、竹野に「天井の低い店二階」に導かれ、「精しい事」を聴かされることになったのである。この「精しい事」といっても、竹野の細君からのちに竹野が聞いたものに基づくとせねばならない。

迎雲館のシーンでは、せきの様子合いに注目したい。SやGはA市の新聞社主催の歓迎会（清々園といふ料理茶屋）で開かれ竹野はここには出ていたがそのまま帰宅したとしていいから烈しい雨降りの中を自動車で送られ、十時過ぎに宿の迎雲館に帰って来た。芳江が前もって歓迎会のあとのSとGを、竹野の細君とせき、芳江の三人で、迎雲館で待っているという「約束」がされていたのである。酒でかなり酔っていたせいか、SやGの話は講演の時より面白かったという。殊にGは女連れの前

では憚られる事までうまく話していたという。せきは「吞まれ切つて頬に空ろな笑ひを浮かべながら、淋しい眼つきで人々の顔を見較べてゐた」のだった。せきにとつてこのような場は初めてのものだったろう。追従笑い、不安からの周囲への配慮があったようだ。が、これは竹野の細君の眼を通してのもので、せきの本当の内心は不明であったとせねばならないだろう。とりわけGの話に「吞まれ切つて」いたと思われ、それまでのせきに見られなかった「笑ひ」には注意すべきある。ともあれ竹野の細君は、そういうせきを「気の毒」に思い、帰り支度にかかると、芳江がしきりに止めた。芳江にはアルコールが入っていて、Sとの関係から、今夜は迎雲館に泊まることが予定されていたのだとしていい。芳江は、せきを連れ座敷を出ようとする竹野の細君に、「貴女」（竹野の細君）が帰ることは「もうお止めしない」けれど、「せき子さんだけはお止めてよ」と「険しい眼つき」で寄って来たのである。Sもせきに泊まるよう勧めた。こうして、せきは「へい」と「微笑」（ここにもう「空ろな」ものはない）しながら答え、「かすかに點頭いた」のだった。ここで、せきが初めて自分の意思を示したと解していいだろう。さらなるSの丁寧な再度の宿泊の誘

いの言葉に、せきは「どちらでも」と言うが、はっきりと帰る意思を示さなかったことは宿泊する意向の方が強かったと見ていいだろう。この時、元来その髪が少し「赤」いとされてきたせきの抑圧されて来た情熱は「堰」を切り始めた、芽吹き始めたと解読したい。だから竹野の細君は「吃驚」したのである。肉体的にも豊かで「力のある」とされる芳江は、竹野の細君だけを廊下に押し出してしまったのである。「いくら女だつて、堅いばかりが能ぢやないわ」という芳江の勝ち誇ったような言葉もこのシーンの締め括りとしてはよいものだったと思う。

竹野の話聞いた贊次郎は「話の重さ」が分からなかった。話す竹野の只事でない「意気込」で「何かしら非常に困つた出来事のやう」にも思われたのである。階下に俥が止まり、竹野が急いで降りて行った。それから「間もなく」して、竹野が何か細君に怒る声かして来たのである。いったい竹野は細君に何を怒つたのだろう。直接的には、せきが「耳隠し」の髪型にして来たことに対する、それを止められなかった細君への叱責としか読めない。細君帰宅後からこの日の朝までの空白にされたものを想像で読み込むしかない。この日の朝、竹野は細君と一緒に迎雲館にせきを迎えに行ったとするのが妥当だろ

う。が、せきはここで竹野の細君に、出来れば髪型を変えたい、ついでにはA市にある髪結屋（今でいう美容院）に同行して欲しいと申し出たのだと思われる。この日の朝、せきは、おそらく芳江（ここにSも加えてもいい）から「廂髪」は古い、「耳隠し」にしなさいよ、と言われたに相違ない。せきは、迷ったかどうかは不明だが、最終的には自分の意思で髪型の変更を決めたのだと思う。竹野は、細君に贊次郎は多分「廂髪」を好まないだろうから、その整髪程度を細君に求めたのではなかったのか。しかるに、せきは、「耳隠し」、「頬」には「紅」などをさした「当世風」になっていたのである。だから、竹野は細君を怒り、二階に戻って、贊次郎に「直ぐ結び直さすよ」と言ったのだと思う。ところが贊次郎は「せきのは余りに旧式だからね。少しは新式にならないといけないのだよ」と反応した。「文学」の「新刊書」を多く読むようになっていた贊次郎としては当然のこととしていい。店の明るい方で「当世風」になったせきを「甚く似合つてゐた」とし、その「恥かしさうに伏眼をしてゐる」せきの「尖つた小さい頤」を指先で摘まんで自分の方に向けてもいるのだ。このシーンは重要だと思う。贊次郎は、これまでと変わらず、せきを美しい人形のように

に、または可愛らしい玩具のように扱っている。一方のせきは、「指先から頤を外し、又俯向いた」のである。この行為には人形から人間への変化が仄見える。そして賛次郎の問いかけにせきは言葉に出して返答することはなかった。「疲れたやうな顔をしてゐるね。直ぐ帰らうか？」には頷くだけ、「講演は分つたか？」には首を振るだけ、「……山崎女史の唄があつたさうだね。いい声だつたらう？」には頷き、「昨晚迎雲館では山崎女史と一緒にだつたか？」には首を振り、「せき、一人にされたのか？」には、「横を向いた儘」、「意味の解らぬ微笑」を浮かべたのである。ここで賛次郎は「どきり」とし、やがてその「心」は「甚く乱された」のである。

賛次郎はすぐ帰ることにし、二階に行くと竹野夫婦は「何かひそ／＼話し合つてゐた」のだった。何を話し合つていたのだらう。さすがに、Gとせきとの昨晚のことまでは分かつていなかったと思う。せきの身に重大な何かが起こつた、その詮索程度にとどまるだらう。細君が席を離れ、賛次郎と竹野は二人きりになる。向かい合つていたが話がまるでない。賛次郎は「火のない宣徳火鉢」に窮屈な姿勢で両手を突き、自身の「心の空虚」と戦っている。ここの「火のない宣徳火鉢」に「賛次郎に愛情

を感じなくなつたせきの隱喩」を読む見解があるが、この日は前日とは違い急に寒くなつていたので、火があつてもいいはずなのに、竹野夫婦は気も動願して火鉢に火の用意をするのを失念していたぐらいに読んではどうだらうか。賛次郎の「心の空虚」、賛次郎と竹野に会話が全くないこと、それらと脈絡を持ち、せきの身に何か重大事があつただらうが、その真相は把握できていないので、まずは「空虚」を表象するものとして「火のない宣徳火鉢」が示されたと解したい。が、やがて、賛次郎には「出窓の千本格子」を透かして、「向う側の競売屋の二階」が見え、「赤地に白くメリヤスとぬいた大きな旗」が「ゆらり／＼大きく揺れてゐた」と描写されるのである。ここを「怒りと悲しみの〈赤〉を強く抑圧して、〈メリヤス〉とぬかれた〈白〉の空虚を露にして震える、賛次郎の苦しい心の様を端的に示す「見事なほど鮮烈な隱喩的光景」と読むこともできるだらうが、別の解釈も可能だと思ふ。私見によれば、「白」すなわち「清浄、純潔」のイメージだったこれまでのせきが、先にも述べた「情熱」の他に「革命」や新思想をイメージする「赤」に凌駕されつつある、と読めるのである。その大きな旗が「ゆらり／＼大きく揺れてゐた」のは、

単に贊次郎の心の動揺の暗喩にとどまるものではなく、贊次郎せき夫婦の今後の生活に大きな揺らぎが生じるであろうこと、ひいては時代そのものが新旧の闘ぎ合いで大きく揺らぐであろうことさえも象徴しているように思えるのだ。

さて、贊次郎が帰る段となつて、せきは「葡萄や林檎やバナナなど」を並べた間に立っていたとされる。ここに「葡萄」はキリスト、「林檎」は禁断の木の果、(バナナ)は男根(誘惑の悪魔)の隱喩を見る見解があるが、これは深読みのように私には感じられた。というのは、元来、「林檎」はその象徴としては多義性を持つものだが、「智慧の樹」、「禁断の木の果」とするには無理があり、それは「イチジク」でなければならぬからである。ここは、梨や柿や無花果ではなく「葡萄」で秋の果物を代表させ、色彩的にその果皮の黄緑色や紅紫色、黒紫色などを想像させ、「林檎」も秋の果物で色彩的にはその果皮の赤色や黄緑色、そして北方の産地を思わせ、当時は高価な果物の「バナナ」で色彩的には黄色、そして南方の産地を連想させるという、カラフルでその産地からすれば地理的空間の拡がりを表わしたある種の混沌さ(この段階でせきの身に重大な変化が起こった真の原

因が摺めずにいること)を象徴するものではなかったかと読むのである。なお、ここでの竹野は「懐手のまま、不機嫌な顔をして框に突立つてゐる」、贊次郎は「その足元に屈んで靴を穿いた」とされている。ここで竹野が「不機嫌な顔」をしているのはそもそも講演会に是非来てほしいと贊次郎を誘った結果がこういう何かハッキリしないが不祥事を招来させてしまった遠因を自分に見ていたからではないかと思われ、贊次郎の屈んだ姿勢は、せき一人を講演会に出させてしまった失態を思い返し、今の屈辱的な状態となった反映として読んではどうだろうか。そして、再三描出される「林檎」には大きな象徴性が込められていたとすべきである。竹野の細君により新入荷の林檎の箱(先に竹野が店先の「溝板」の上で開けていたもの)から幾つかの林檎が取り出され荒い目籠に入れられて車夫に渡された。これは贊次郎夫婦への土産品である。ここに「不和のリンゴ」説を読むのが適切のように思える。贊次郎夫婦は、今後いよいよ不和の方向性に向かうことがその日町への帰還の道中で暗示され、ここの土産品としての「林檎」はその先取りのものとして読めるからである。

八

贊次郎とせきがH町に帰る場面を検討してみたい。

「行きと帰りの場面は、陽と陰、光と影、希望と絶望の対比がくっきりと鮮明に描き分けられている」という清水正の見解⁽³⁴⁾は正しい。朝とは違い、風（北風）は「向ひ」となるので寒かったという。これは省略されているが、贊次郎は、やはり自転車に乗り、せきを乗せた傳と近い位置で並走しているのだと思う。せきは終始沈黙している。贊次郎が話しかけても「肩掛け」に頬を埋め、返事をしないのである。こうして、語り手は贊次郎の内面に入り込み、「打ち砕かれた淋しい心、何をいつてもそれに触れさうな恐ろしさで、凝つと、不機嫌に黙り込んでゐる、さういふせきであらうと贊次郎は思つた」としている。つまり、贊次郎には昨夜せきの身に何か重大なことが起こった、予測としては、Gに強姦された（性暴力を受けた⁽³⁵⁾）のでは、とされているのではなからうか。そのせいで「打ち砕かれた淋しい心」となり、「不機嫌に黙り込んでゐる」と贊次郎がせきの内面を付度していると解読したい。また、そういった打ち沈んだせきの様子合

いから、贊次郎には、先にA市で「耳隠し、頬紅などの当世風」に変化していてそれをよく思ったのだが、「陽なたの田舎道」では、それは不調和なものとなり「醜く」見えたのだと思う。

贊次郎もせき同様黙っていたかった。が、「年寄の車夫」が贊次郎にしきりに話しかけて来たのである。郵便の簡易保険（大正五年十月施行）とはどういうものか、A市の郊外に工場が出来るので田より畑の方が値がよくなったとか、贊次郎の町の某の息子が新潟の医専を出て市の病院勤めをするのか町で開業するのか、などの話題に尽きなかったという。ここで「新潟の医専」とあるが、当時は岡山医専、千葉医専、金沢医専、長崎医専もあり、A市が明石市と特定されるのを避け、遠方の「新潟の医専」をカムフラージュのために用いたものと思われる。ともあれ、車夫とのお喋りがつらくなつた贊次郎は、せきの疲れを気にしながらも、「どうだらう。此辺から歩かうか」とせきに言ったのである。

こうして「大きな榎」のある「県道から町へ分れる所」で、せきは傳を降りた。江戸時代には「榎」は街道の一里塚に植えられる。現在の地図帳によっても、A市を明石市とした場合、榎谷街道（「県道」に当たろう）

に沿って北上しほぼ三里(約12km)に当たる地点はH町(福谷)となるのである。あとは「町を縦に貫く道」「店家」(少ない)を少々歩くことにしたので。賛次郎は、竹野の細君から渡された「果物の籠」を自転車に移し、自転車を曳きながらせきと肩を並べて歩いた。ここで「熟れ切った稲の香が強く鼻へ来る。足元からうるさく稲子が飛び立つた。逃げまどつた一疋がせきの肩に止り、暫く二人の道連になつた」という描写部分に注目したい。ここにある種の象徴性、隠喩が見られると思うからである。ここの「熟れ切った稲」、そしてその強い「香」は、せきの若い肉体を象徴しているように思える。そこに「足元からうるさく稲子が飛び立つた」のである。「稲子」は稲などの害虫である。「うるさく」とあるから群れをなしていただろう。前掲のシンボル事典(註)によれば、「イナゴ」は、群れをなす場合、「災厄」「災害」の「すぐれた直喩にも暗喩にもなる」としている。そこで、このシーンから、今後の賛次郎せき夫婦に「災厄」「惨事」が襲って来る暗示として「稲子」の群れが隠喩として用いられたと解されるのである。では、その「稲子」の「一疋」がせきの肩に止まり、暫く二人の道連れになつたことをどのように解説すればいいのだろうか。「稲子」

(稲の害虫↓文学の毒の部分↓バイキン)は、強い「香」を放っている「熟れ切った稲」(若々しく健康で美しい肉体を持つせき)に侵食しようとしている、いやすでに侵食してしまったことを表象しているのではなからうか。敢えて深読みをすれば、せきはG(文学の毒の部分↓バイキン)の胤を宿してしまった可能性もあると読むことはできないだろうか。このように解することで「雨蛙」という作品は「幅と広さと視野」が大いにあるものとなるのである。

さて、せきは「少しも口を利かず、賛次郎のゐるさへ意識しないやうに、ぼんやり遠い一点を見つめて歩いてゐた」のである。このようなせきの様子を見つめる賛次郎は、「何かせきが其処に或幻影を認め、それを見つめる事から氣の遠くなるやうな陶酔を感じて居るのではなにかしらといふ氣が不図して来た。打ち砕かれた淋しさの不機嫌としては余りにその眼は何かを夢見てゐた。如何にも甘い夢だ。それに酔ふ一種の喪心状態」にある、と思われたのだ。賛次郎には、先の俚の中のせきは「打ち砕かれた淋しい心」から「不機嫌に黙り込んでゐる」と見えたのだが、ここではそうではない。全く逆だとしていい。せきに「打ち砕かれた淋しさの不機嫌」な

どではなく、せきは「或幻影」を見つめることで「氣の遠くなるやうな陶醉」を感じている、「如何にも甘い夢」に酔う「一種の喪心状態」にある、と贊次郎は認識したのである。そういうせきの「心持」が贊次郎に反映して来た。だから、贊次郎は「思はず頼に血の昇る」のを感じ、「胸の動悸」を聴いたのである。贊次郎の先の予測（Gによる強姦）は、「力に溢れ切つたやうなと云はれるGと、此の美しい肉附のせきと、此関係は實際不思議な力で彼の肉情を刺戟して来た」（Gとせきとの和姦、姦通という予測）へと変化したと解されるのである。

こうして贊次郎はその息をはずませながら優しい声で昨夜のことをせきに訊ねていくのだった。ここでせきが贊次郎の質問攻めにハッキリとした言葉で返答していることに注意したい。先のA市での二人の間答シーンとはまるで異なるのだ。やがて贊次郎はせきとGの姦通を認識する。だが、贊次郎は「不意に」その場でせきを「抱きすくめたいやうな氣持」、せきが「堪らなく可愛い」という「発作的な氣持」に襲われたのだった。しかるに、これも咄嗟に、「其不思議な氣持」から飛び退いたのだった。そして贊次郎はそういう氣持ちが静まるのを待つもの、「淡いなり」の「せき、をいとほしむ心で一杯だつ

た」としている。さらに暫くして贊次郎は道傍の草へ「長い小用」をした。これは「欲情の代理行為」としていいだろう。このような贊次郎を「変態性慾者」とした同時代評の生田長江の見解は正しいものである。また、われわれ読者は、「自分は無道德といふ事には或る種の美しさがあると思つてゐる。……（略）……あの女主人公が無道德であればこそ一種の美しさを持つてゐるのだ。そして無道德であればこそ男主人公にも道德的判断が先に立つて来ないのである。赦せるのである」（隨筆「雨蛙」に就いて）という作者志賀の自注を素直に受け入れるべきだと思ふ。なお、ここで「一種の喪心状態」にあるせきをどのようにみるべきなのか。やはり「官能の目覚め」としていいように思ふ。せきは美しい人形から生身の肉体を持った女に変貌を遂げたとしたい。

一方が田、一方が森になっている所で、贊次郎が自転車電柱に持たせ、「長い小用」をしたあと、何気なく上を見て、電柱の途中に「何か青い物」を認めるシーン以降の考察に移りたい。題名ともなった重要な場面が形成されているのである。贊次郎はその「何か青い物」が「雨蛙」だとすぐ気づくが、「森の傍で何故こんな柱などに住んでゐるのだらう」かと考えた。「雨蛙は其電柱が

未だ山で立ち木だった頃、其処から小さい枝が生えてゐた、その跡が朽ち腐れて今は臍のやうな小さな凹みになつてゐる、その中に二疋で重なり合ふやうに蹲つて居た」とされる。これはどういふことをいつてゐるのか。雨蛙の多くは樹上生活をする。だから、この二疋の雨蛙も近くの森にその住まいを設けるのが普通である。だが、この二疋の雨蛙は、多くの雨蛙たちとは隔絶し、電柱の凹みの中を住まいとしてゐる。それを贊次郎は「如何にもなつかしく、又親しみのある心持」で眺めたのである。電柱の少し上には「蜘蛛の巣だらけの電球」があり、その「電球」の「灯」に集まる「虫」を捕えれば食べることは苦勞はいらず、凹みの巢に戻れば雨風もしのげるし、また森とは違い外敵から狙われる心配もないのである。安穩な生活が送れる住環境なのである。そしてこれは、一つの組合があり互助制度が確立してゐて、県道よりも立派な道があり、その道の左右へ入る小路には人の歩くだけは一筋に平石が敷いてあるという瀟洒さもある日町に重なるものである。だから贊次郎はこの二疋の雨蛙を、自分達同様に夫婦者だろうとし、その住まいを「つつまじやかな世帯」と言い、日町に帰ると「つつまじやかな町」として「如何にも久しく見ない所」だった

と思うのである。が、電柱の中程の小さな凹みを住まいとする雨蛙夫婦と日町に住まう贊次郎せき夫婦が大筋で重なるものがあるとしても、その内実、機微を読み込まなければ、作者がこの場面を描いた意味を捉えたことにはならない。贊次郎せき夫婦の場合、贊次郎が「文学」に接する以前の新婚生活からの僅かな時代、大目に見ても、せきを美しい人形妻としていたのをA市に越境させてしまふ以前の生活を指しているのだと思う。それは「何か青い物」の「青」の色のイメージである「若い」。また、若くて未熟である「贊次郎夫婦とこの電柱の凹みに住まう雨蛙夫婦が二重映しになつてゐるのである。だから贊次郎には「如何にもなつかしく、又親しみのある心持」で眺められたのである。だが、贊次郎がせきとその雨蛙を示しても、せきは「何の興味も持たなかつた」のだ。これをいかに解説すればいいのか。贊次郎せき夫婦は、日町に住まう時から実は小さな亀裂を生じさせていたのだが、まだ修復可能なものを有してゐたと思う。それは贊次郎が名実ともに美濃屋の主となり、せきが家事の実権を持てば、安穩とした日町で末永く仕合わせでいられたのである。しかるに、贊次郎は美しいせきを日町に留めいけば困い込み、贊次郎だけがA市に時々赴き

「文学」を撰取していき、その「文学」に関連して偶発的にもあるいは不運にも、せきをA市に越境させたことで「文学」の毒（GやS・バイキン）に感染、そのいわば抵抗力がないために、皮肉にも、せきは美しい人形妻から生身の肉体を持つ女に変貌するということになったのである。こうして夫婦関係に大きな溝、齟齬を生じさせ、もはや修復不可能の域にある状態となっているのである。先行研究のなかで、この夫婦が「まずまず離れていく印象を与えるばかりである」とする読み、また「この二人の間には、真に互いに心を通わせる愛というものは存在しないと云える」という読み、さらに踏み込めば、「この後、彼は美しくなった妻に翻弄され続けるのではないだろうか」とする岸規子の読みが、適切なものだったように思える。そもそも「美濃屋」の「美濃」の国には不破関があり、不破が不和に繋がり、関がせきに繋がり、贊次郎の造り酒屋が「美濃屋」とされたこと自体に、夫婦不和を齎すせきという含意もあったように思えてくるのである。

その夕方、贊次郎は、「四五冊の小説集」（Gのものとしていい）と「二冊の戯曲集」（Sのものとしていい）を、沢山の本でいっぱいであったらう「本箱」から抜

き取り、人目につかぬように裏山の窪地へ持ち出し、何か悪事をする者のような「臆病さ」で焼き捨て、ようやく安堵した、ということとエンディングとなっている。

ここで贊次郎は、「文学」すべてを捨てたわけではないことに注意したい。直接的にはGへの嫉妬、加担者Sへの怒りからの行為であろうが、贊次郎自身がひどい目に遭わされた毒やバイキンを持つ「文学」を抜き取り、その排除をしたに過ぎないのである。川端康成がその時評で「雨蛙」の「主題の一つに、心の純朴と素直を汚す文藝の雑音に対する叱責があると見てもいゝであらう」とした「文藝の雑音」とは一部の「文学」の持つ毒やバイキンを指していたように思える。なお、このラスト二行のエンディングでは、贊次郎がGと姦通した無道徳から一種の美を持つせきを心底から赦せる心境になっていたとするには無理があるだろう。それは一過性のもののように思えてしまう。少なくとも私には、贊次郎の、本当の意味での心の寛大さは伝わらず、せきへの愛情ではなく愛着（川端康成の時評でこの言葉は使われていた）が示されて幕となった印象を拭い去れない。

優れた文学作品はその作者から遊離し一人歩きをしてしまふものである。「雨蛙」を論じる際、作者志賀の自

注の類いにあまりに囚われてしまつてはいけなからう。「雨蛙」は、これまで見てきたように、私としては「絶妙の短篇」だったと高く評価したいと思う。

おわりに

余滴として、私が本稿で「雨蛙」をリアリズムとサンボリズムの融合体小説とした理由を簡単に述べておきたい。それは、志賀の「鶴」(『新潮』、大15・1)についての田山花袋の時評に「志賀直哉の『鶴』に来て、私は始めてすぐれた作に接した。『うむ！これは好い！』私ばかり独語せずにはゐられなかつた。……(略)……つまりリアリズムにしてリアリズムにあらず、サンボリズムにしてサンボリズムにあらざるこの作者の長所がこの作に最もよくあらはされると言つて然るべきであらう」(『讀賣新聞』、「一月の小説」、大15・1・20)とあることが契機となっている。この田山花袋の評に志賀は「花袋讀賣にて「鶴」を讚める、過賞なり あれは自分では甚だ不滿の作品だ、然し花袋の好意は嬉しく感じた 先年五十才祝賀に賛同断つた事氣の毒に感じた」(大正十五年一月二十五日の志賀日記より)と反応して

いる。ここから「雨蛙」の小説としての特徴をよりの確に表現する場合に援用できるのではないかと考えたのである。従来、志賀直哉といえればリアリズムの代表者と見られて来たが、「雨蛙」に限らずその多くの作品に、サンボリズムの側面も見ざるべきではないのかと感じている次第である。

注

- (1) 「雨蛙」を論じた研究論文を掲げておく。
- ① 木村泰子「志賀直哉における「雨蛙」執筆の意味」(『国語国文論集』第十三号、安田女子大学文学部日本文学科編、一九八四(昭59)・六)
- ② 越智良二「志賀直哉「雨蛙」の問題」(『愛媛国文と教育』第二十四号、愛媛大学教育学部国語国文学会、一九九二(平4)・一二)
- ③ 中村智「妻の姦通に欲情する夫——志賀直哉「雨蛙」論——」(『山口国文』第二十三号、山口大学人文学部国語国文学会、二〇〇〇(平12)・三)
- ④ 岸規子「志賀直哉「雨蛙」とその周辺」(『芸術至上主義文芸』二十七、芸術至上主義文芸学会、二〇〇一(平13)・一一)
- ⑤ 田中絵美利「志賀直哉「雨蛙」論——〈男〉たちの〈美しい夫婦の物語〉——」(『日本近代文学』第71集、日本近代文学会、二〇〇四(平16)・一〇)

- ⑥ 清水正『雨蛙』を読む——志賀文学の可能性の極北——(『志賀直哉—自然と日常を描いた小説家—』D文学研究会、二〇〇五(平17)・一一、所収論文)
- ⑦ 張蓮「志賀直哉『雨蛙』を読む——不義の妻と欲情する夫について——」『多元文化』第8号、名古屋大学国際言語文化研究科国際多元文化専攻、二〇〇八(平20)・三)
- ⑧ 唐澤聖月「志賀直哉『雨蛙』論——夫婦関係の問題を中心に——」(『有島武郎研究』第十二号、有島武郎研究会、二〇〇九(平21)・九)
- (2) 大正十二年二月二十日の武者小路実篤宛志賀書簡には、「フローベールの「真心」といふのを見て大変い、刺激を受けた、「真心」は支那なら神品といふ印を捺すやうな作品に思つた、内容主義や技巧主義を超へた芸術品だと思つた」という記事が見られる。
- (3) 瀧井孝作「志賀さんの生活」の「四、我孫子にて・C」(『随筆集志賀さんの生活など』新潮社、一九七四(昭49)・五に所収)。なお、この折(大正十一年)の「回覧雑誌」からの収穫だろう、「橋本基君の小説『盜癖』は、『改造』の大正十一年十一月号に初掲載であつた」としている。
- (4) 瀧井孝作「志賀さんの生活」の「五、京都にて」(『隨筆集志賀さんの生活など』新潮社、一九七四(昭49)・五に所収)。ここでは大正十二年の春からの志賀さんの生活を語っているのだが、暑い夏、志賀さんの「この時の仕事は『雨蛙』の執筆中で、昨年我孫子で見せられた

初めの所の原稿五十枚ほどは惜し気もなく打ち捨て、二十三枚の短篇に改められたが、『雨蛙』は一年半もかかった」としている。

- (5) 黒田義隆『明石市史 下巻』(明石市役所発行、一九七〇(昭和45)・一一、復刊は一九九二(平4)・一一)
- (6) 『回顧三十年』(兵庫縣明石師範學校編、一九三三(昭8)・六、(非売品))
- (7) 『新修神戸市史 歴史編IV近代・現代』(新修神戸市史編集委員会編、一九九四(平6)・一一)
- (8) 『大都市の中の農村——神戸市西区越谷町の歴史と民俗——』(和泉書院、一九九四(平6)・一〇〇)
- (9) 兵庫県土整備部土木局道路保全課にある『県道路線変遷等資料(大正9年〜再編成まで)』(土木部道路補修課)を参照した。なお、大正9年以前のもは兵庫県庁の上記の部署には残っていない。
- (10) 「福谷村のごとく」(<http://www.fukutanamura.com/about/history.html>) によろ。
- (11) 藤原定編「倉田百三年譜」(『現代日本文学全集74阿部次郎 倉田百三集』筑摩書房、一九五六(昭31)・八)
- (12) 長與善郎「わが心の遍歴」(筑摩書房、一九五九(昭34)・七)
- (13) 注(5)黒田義隆『明石市史 下巻』の「明石市年表」による。
- (14) 「市の寄宿舎」とされ「A市の寄宿舎」とはされていない。もしA市を明石市とすれば、当時中学校はなく、近隣の姫路市にある姫路中学校あたりが想定される。た

だ「市」としたところに周到なものが感じられる。

(15) 注(1)②越智良二論文および注(1)⑦張蓮論文は、贊次郎を農科大学中退としているが、これは誤読としたい。

(16) 注(5)黒田義隆『明石市史 下巻』には、「大正十三年ごろ、明石に潮流社(樽屋町)があって雑誌「潮流」を発行していた。主として短歌であるが、詩や俳句も収めていた。編集者は木村栄次で、……(略)……」という記事があり、「雨蛙」のA市が明石市だとすれば、作中の竹野茂雄らにもモデルがあったのではないかと思わせるものがある。

(17) 曾野綾子「志賀直哉「雨蛙」」(『群像』、一九八八(昭63)・五)。これは「私の好きな短篇」として書かれた一頁分の文章だが、引用部のほかに曾野綾子は、姦通事件が竹野らから「贊次郎に伝えられる経過の微妙さは息をのむばかりに精巧である。あらゆる何気ない小道具や風景がそのために寸分隙もなく動員され、しかも決して息苦しくない」などと称賛し、「雨蛙」を「日本の、ではなく、世界的な名作だと思った」としている。だが、のちに曾野が「雨蛙」について書いたもの(『夫婦、この不思議な関係』、WAC、二〇〇六(平18)・一)で、せきは陰気で弱い妻だを意識せずとも或る世渡りの常識を持ち合わせているとしたのはともかく、おそらく贊次郎せきの夫婦は一生離婚もしないだろうし、地方の名家として夫婦は尊敬を集めて暮らすだろうと思われ、としていることには賛同しかねる。

(18) 注(1)⑧唐澤聖月論文

(19) 注(1)⑦張蓮論文

(20) 『明鏡国語辞典 第二版』(北原保雄編、大修館書店、二〇一〇(平22)・一二)の「赤」のイメージと表現」の項の⑤として「情熱・闘志の象徴」とある。

(21) 注(1)③中村智論文

(22) 生井知子は、このノート記事を「雨蛙」の「着想の元」になったものとして、「志賀直哉の潔癖性をめぐって」(『解釈と鑑賞』、至文堂、二〇〇三(平15)・八)を「白樺派の作家たち 志賀直哉・有島武郎・武者小路実篤」(和泉書院、二〇〇五(平17)・一二)に収録した際、注記で付加している。また、拙稿「志賀直哉が読んだ泰西文学——その受容と影響をめぐる考察——」(『文芸研究』第百二十六号、明治大学文学部紀要、二〇一五(平27)・三)で、この記事の内容を簡単に紹介し、「雨蛙」における劇作家Sがシュニツラーを、小説家Gがゴーリキエを擬したものとはほぼ断言できるとしている。

(23) 『新明解国語辞典第五版』(三省堂、金田一京助、山田忠雄(主幹)、一九九七(平9)・一二)

(24) 拙著『志賀直哉——青春の構図——』(武蔵野書房、一九九一(平3)・四)の「青春の再生——『暗夜行路』・構想をめぐって」、二二二頁・二二五頁を参照のこと。近松秋江は、「和解」を読み、主人公はその父親の不和でありながら、その「何の不自由なき生活の資本」が父親の「麻布の家」から出ていると「洞察」する時、「何の事だい、笑はせやがる!! 不和が聞いて呆れらあ、和解は初鼻から出来てゐる」という感じを抱かせる、と拙

判したのだった『讀賣新聞』、『文藝時事 下』、一九一七(大6)・一〇・二五)。志賀はこの批判文に憤激を覚え、「第一に自分の最初の兎の死と秋江の野倒れ死とを対照して何かいつてゐる所で自分は甚く汚がされた気がした」、「秋江はひがむである」、その現われ方が「下等になり過ぎ」、それを「武器」にしている、またある時、秋江が何かで、「どんな美しい女を見ても、其女が便所にゐる様子を考へると、どうでもない」という意味の事を言っていた事を聴いて、「馬鹿な奴」だと思った、「中年者の作者」で秋江と同じような「物の見方」をするのが何人かあるが、ここからは「本統の人生」は見えてこないものであるという反駁文(未定稿¹⁰⁰)を書き、それは発表には至らなかつたが、のちの「暗夜行路草稿」29、32で「春湖」という「あの馬鹿で下品な小説家」を造形する際も、近松秋江の悪いイメージは影響していると思われることができる。

(25) マイケル・ファーバー著・植松靖夫訳『文学シンボル事典』(東洋書林、二〇〇五(平17)・八)。その「序」で「この事典は昔からの伝統的な象徴表現、つまり多くの作家が昔から使い続けてきた象徴的な表現しか扱っていない」とし、『聖書』かギリシア・ローマの古典文学に始まり、英訳された「西洋文学」を中心とした用例を並べていて、「読者にとって知る必要があるのは、昔から伝わっている象徴的な表現、何千年もの歳月を経てなお変わらず使われている小道具で、しかもなんの説明もなく表われたり、長い伝統の中でしだいに含意が深まっ

ていて独自の意味を持つたりしている象徴的なものである」としていることに、私は信頼すべきものを感じた。なお、「雨」のもう一つの面は「天からの恵みとしての雨」とされている。

(26) 注(1)⑥清水正論文は「雨蛙」の多くの箇所には象徴性や隠喩を讀んでいて、刺激的な力作論文だと思われた。

が、異論もあるので随時注記していきたい。清水正が「男の噂がたえない芳江と、竹野一本槍の細君、この二人の間には日頃から確執の溝があったとも考えられる」としたことは同意できるが、「竹野の細君もまたGに何となく惹かれて」いて、「せきをひとり残して夫のもとへと帰ってきたのは、いわば自らの代理としてGに身を捧げさせたとも言えるのである」としたのは深読み過ぎるように思える。先にも述べたように、竹野の細君とせきの間には日頃から付き合いが乏しく、親密性はなかつただろう。また、竹野の細君は、彼女よりかなり年上と思われる芳江(芳は葦、悪しに繋がる)の「悪」の「力」(体力的に勝る)に圧倒され、せきの泊まるという意思表示に驚き、一人帰るしかなかつたものと解したい。

(27) 注(1)⑥清水正論文

(28) 注(1)⑥清水正論文

(29) 注(20)国語辞典の「白」のイメージと表現」の項の①として「清浄・純潔である」とある。

(30) 注(20)国語辞典の「赤」のイメージと表現」の項の②として「革命、共産主義、労働運動などを喚起」とある。

(31) 注(1) ⑥清水正論文

(32) 注(25) 『文学シンボル事典』の「リング」(林檎)の項で「西洋文明のなかで最も有名なリングといえはヘデンの園」に生える(智慧の樹)のリングだが、「聖書」を典故とするには少々無理がある。「創世記」には、ただ「果实」(the fruit)としかない。これはイチジクのことだろう。なぜなら、アダムとイヴがそれを食べたすぐあと、二人でイチジクの葉を編んで腰布にしているからだ」としている。

(33) 注(25) 『文学シンボル事典』の「リング」(林檎)の項で「ギリシア・ローマの神話にも一つ有名なリングがある」とし、それはトロイア戦争の原因になった「不和のリング」であるとしている。志賀はギリシア神話(そのうちの、女神アテナと機織りや刺繍の非常に上手なアラクネという処女との競争の話)をもとに「荒絹」『白樺』一九一七(大6)・一一」という作品を創作している。志賀にギリシア神話の知識はあったはずで、この「不和のリング」のことも知っていた可能性が高い。ギリシア神話では、ペレウスとテティスの婚礼の時に不和(争い)の女神なるエリスが招かれなかった腹いせに「一番美しい方へ」と書かれた黄金の林檎(不和のリング)を一個ほうり投げ、天空神ゼウスの妻の女神ヘラと智慧の女神アテナと美と愛と豊穡の女神アプロディテの三者がめいめいその林檎は自分の物だと言い張ったことがトロイア戦争の発端とされている。これを「雨蛙」の小説世界に置換すれば、エリスは竹野の細君ではなく

「遠く」にいる林檎生産地の何者かに当たり、土産品の林檎は数個だがその中一個だけいわば黄金の林檎(不和のリング)が紛れ込んでいて、祖母、賛次郎、せきの三者に不和(争い)が起こり、やがて「桃源」的な日町全体にもそれが波及するという恐ろしい後日譚さえ想像できることになる。ともあれ、作者志賀は、意図的に竹野夫婦がA市で「水菓子屋」を営むことに設定し、とりわけ「林檎」にある象徴性を込めていたとすべきではなからうか。

(34) 注(1) ⑥清水正論文

(35) 注(1) ⑦張連論文

(36) 注(25) 『文学シンボル事典』

(37) 志賀直哉は「暗夜行路」第四の八(初出は『改造』、一九二七(昭2)・九)で、直子の二度目の懐妊、出産に際し、月を逆算して、謙作が朝鮮旅行中(直子と要の過失があった)の可能性を思い、不安を感じ、慄然とすることを描いていた。短篇「雨蛙」の後日譚は読者に委ねられているが、せきを「妊娠できない女」と決めつけると作品の「幅と広さと視野」は狭まってしまふのだ。

(38) 注(1) ⑥清水正論文

(39) 注(1) ④岸規子論文

(40) 注(20) 国語辞典の「青」のイメージと表現」の項の②として「若い。また、若くて未熟である」とある。

(41) 注(1) ⑧唐澤聖月論文

(42) 注(1) ⑦張連論文

(43) 注(1) ④岸規子論文